

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

未来表現の認知言語学的分析：will と be going to に焦点を当てて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2024-10-10 キーワード (Ja): 英語モダリティ, 英語（疑似）法助動詞, メンタル・スペース, 認知言語学, 予測 キーワード (En): 作成者: 長友, 俊一郎 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/0002000253

未来表現の認知言語学的分析

— will と be going to に焦点を当てて —

長 友 俊一郎

要 旨

「モダリティ」は、様々な言語学の理論や枠組みに基づいて分析されてきており、英語（疑似）法助動詞と、現実性、仮想性、モダリティ体系、主観性、主体性などとの関連等が検証されている。その中で、「メンタル・スペース」の概念を用いたモダリティやムードの研究の学術的貢献が期待されているが、その研究は非常に少ない。本稿では、will と be going to の促すメンタル・スペース構築を提出する。まず、モダリティの本質が「非断言」にあるとしたうえで、（疑似）法助動詞によって設定されるスペースの特徴を整理する。次に、「予測」を表す will と be going to の比較をメンタル・スペース理論の枠組みで提示し、スペースの現実性の違い、スペース内の情報の言語化の有無の違い、特定のスペースの設定の必然性の違い、スペース内の情報の質の違いを明らかにする。そして、本アプローチが、義務的なモダリティを表出する（疑似）法助動詞の分析にも有効であることを主張する。

キーワード：英語モダリティ、英語（疑似）法助動詞、メンタル・スペース、認知言語学、予測

1. はじめに

1960年代以降、「モダリティ」（＝話し手の心的態度）は、体系文法、統語論、（形式）意味論、語用論、認知言語学など様々な言語学の理論や枠組みに基づいて分析されてきており、（疑似）法助動詞と、現実性、仮想性、モダリティ体系、主観性、主体性などとの関連等が検証されている。その中で、「メンタル・スペース」(mental spaces) の概念を用いたモダリティやムードの研究の学術的貢献が期待されているが、その研究は非常に少ない (Boogaart and Fortuin 2016: 520)。本稿では、意味論的・語用論的観点から、will と be going to の促すメンタル・スペース構築を提出する。

2 節では、モダリティの本質が「断言」(assertion) / 「非断言」(non-assertion) にあるとしたうえで、（疑似）法助動詞によって設定されるメンタル・スペースの特徴を整理する。3 節では、「予測」を表す will と be going to の比較をメンタル・スペース理論の枠組みで提示し、メンタル・スペースの現実性の違い、スペース内の情報の言語化の有無の違い、特定のスペースの設定の必然性の違い、スペース内の情報の質の違いを明らかにする。4 節では、本稿での

アプローチが、義務的なモダリティを表出する（疑似）法助動詞の分析にも有効であることを主張する。

2. メンタル・スペース理論からの法助動詞へのアプローチ

2.1. メンタル・スペースの特徴

メンタル・スペースの概念は、法助動詞によってどのような情報がどのように伝えられるかを明らかにする。メンタル・スペースは、思考が進むにつれ、次々に構築される局所的な認知領域とされ (Fauconnier 1994: xxxvii), 複数のメンタル・スペースが設定される場合, 異なる種類の情報が異なる領域に分割されることになる (Fauconnier 1997: 38)。Lampert and Lampert (2000) の研究は、このメンタル・スペースの概念を用いて法助動詞を分析した貴重な研究である。次の例を見られたい。

- (1) You *must* stop smoking in here. (Lampert and Lampert 2000: 247)

Lampert and Lampert (2000: 247) は、*must* 構文において、2つの異なる情報を含むメンタル・スペースの設定があることを、(2) のように指摘した。

- (2) ... in that [Base] Space an element **a** (you) ... is associated with property 'smokes' (this element is identifiable as the Agonist of TALMY's Force Dynamics configuration); and, finally, this element's counterpart **a'** in the focus space M[ust] associates the property 'stop smoking' ... M turns out to be the focus space of this particular mental Space constellation, with *must* evoking the relevant Force Schema, that is, Compulsion.

(Lampert and Lampert 2000: 247)

この分析は、*must* が「あなたがタバコを止める」という「基底スペース」(Base Space) の情報 (= 「あなたはタバコを吸っている」) とは異なる情報を含むメンタル・スペースを導入していることを明らかにしている。また、「力のダイナミクス」(force dynamics) (Talmy 1988, 2000) や「力のスキーマ」(force schema) (Johnson 1987) といった認知言語学におけるモダリティの先駆的研究も反映するものとなっている。次節では、英語（疑似）法助動詞によって設定されるメンタル・スペースには、一般的にどのような情報が内包されるのかを考えてみたい。

2.2. (疑似) 法助動詞が設定するメンタル・スペース

Palmer (2003: 5) は、モダリティは、命題の「ありよう」(status) に関連し、命題が「真」(true) であるかどうかという観点からの特徴づけでは十分ではなく、「確言」(assertion) か「非確言」(non-assertion) という観点からの特徴づけが必要であるとしている。(3) は確言が行われない場合のコンテキストである。

- (3) a. 話し手が命題内容の真相について疑念を持っており、命題内容に関する真偽値が明らかではない場合
b. 命題内容が実現されておらず、真偽値が明らかではない場合
c. 命題内容が話し手と聞き手によって前提とされており、価値がある情報とは見なされない場合 (Lunn 1995: 230, cf. Palmer 2003)

Palmer (2003: 6) は、評価的 should を含む (4) を提示し、(3c) の共有情報に由来する非確言性と英語法助動詞との関わりを指摘している。

- (4) I'm surprised that you *should* think that. (Palmer 2003: 6)

Palmer によれば、「君がそう思う」という should の命題内容が、話し手と聞き手によって事実として受け入れられており、情報価値が高くなく確言されないため、法助動詞 should が用いられているとしている。以下、モダリティを表す(疑似)法助動詞は、確言されない情報を含むメンタル・スペースを設定すると仮定する。

2.3. モダリティと動機づけ

モダリティ表現の非確言性を踏まえ、澤田 (2018: 6) では、モダリティは (5) のように特徴づけられている (cf. 澤田 2006: 2)。モダリティは言語主体による事柄の捉え方と深く関わっている。

- (5) モダリティとは、事柄 (すなわち、素材、命題内容) に関して、単にそれがある (もしくは真である) と述べるのではなく、その事柄に関する情報はどのようにしてもたらされたのか、その事柄はどのようにあるのか、あるべきなのかということを表したり、その事柄に対する知覚や感情を表したりする意味論的なカテゴリーである。 (澤田 2018: 6)

たとえば、「その事柄はどのようにあるべきなのか」を問題にする場合、「なぜ、何のために、

どのような目的で、どのような条件のもと、そうあるべきなのか、すなわち、(6)の「動機づけ」がポイントになり得る。なぜなら、それ相応の動機がなければ、相手に義務という負担を負わせることは不合理であるからである。

- (6) 話し手が、(疑似)法助動詞によってモダリティ (= 心的態度) を表明する場合において、その表明の引き金となる、理由、目的、条件など。 (澤田1999, 2006)

しかるべき動機づけがない場合には、意味が通らないことがある。たとえば、The rock'll fall down. のような「省略的」な発話の場合、「どのような条件で?」という動機づけが問われよう (cf. Binnick 1971: 3)。また、You *must* {go/come} home by ten o'clock! のような発話の場合、「なぜ?」という動機づけが問われよう。(6)の「動機づけ」の概念は、管見の限り、澤田 (1999) によってはじめて本格的に導入されたものである。その後、澤田 (2006, 2018)、長友 (2012, 2018b, 2019) によって研究の発展を見せている。

3. 「予測」の will と be going to

3.1. 「予測」と「予測可能性」

Coates (1983: Chapter 7) によれば、will は 4 つの意味を表す。

- (7) will の表す 4 つの意味：
- a. 「意欲」 (willingness)
 - b. 「意図」 (intention)
 - c. 「予測」 (prediction)
 - d. 「予測可能性」 (predictability)

(7a)「意欲」と(7b)「意図」は「根源的」(root) 意味とされ、(7c)「予測」と(7d)「予測可能性」は「認識的」(epistemic) 意味とされる。また、(7b)-(7c) は、be going to でも表される意味とされている (Westney 1995: 186)。

「予測」と「予測可能性」に関して、次の例を考えてみよう。

- (8) They *will* probably be bored with me anyway. (Coates 1983: 179)

- (9) A commotion in the hall. "That *will* be Celia," said Janet. = {I predict [that is Celia]}
(Coates 1983: 177-178)

(8) のような「予測」の will を含む文は、I predict that で書き換えられ、主陳述は常に未来に言及する。(9) のような「予測可能性」の will を含む文は、I (confidentially) predict that it is the case that p で書き換えられ、主陳述が指している時間は現在である (Coates 1983: 177-179)。以下、(8) のような「予測」を表す will と be going to を分析の対象としたい。

3.2. will のメンタル・スペース構築

「予測」の will を含む文が、顕在的動機づけ (= 条件) を伴う場合、その動機づけは、現実的なものにはならない。

(10) (*If the speaker has seen the milkman coming*)

*If the milkman's here, Jenny *will* open the door for him. (Declerck and Reed 2001: 87)

話し手は、牛乳配達員が来るのを見ている。よって、ここでの will によって表される「予測」の動機づけとして提示されている「牛乳配達員がここにいるというのなら」という条件は現実的であり、この現実性が will の使用を不自然なものにしている。次の事例を考えてみよう。

(11) a. If you add whipped cream, the fruit salad *will* taste better.

b. If you drop this glass, it *will* break. (Dancygier 1998: 80-83)

Sweetser (1990: 129) は、(11) のタイプの条件文を (12) のように特徴づけている。すなわち、後件に will を含む条件文の場合、動機づけとして提示される条件は、非現実的である。

(12) The protasis is hypothetical if the conditional is content-domain. (Sweetser 1990: 129)

(11) の条件文は、Dancygier (1998) や Dancygier and Sweetser (2000, 2005) では、「予測的条件文」(predictive conditionals) と呼ばれ、(13) のメンタル・スペース構築を促すとされている。

(13) A predictive conditional, then, sets up a correlation of parameters which structures alternative mental spaces. *If it rains tomorrow, they'll cancel the game* sets up alternate mental spaces ... one wherein it rains and they cancel the game, and another wherein it doesn't rain and they don't cancel the game.

(Dancygier and Sweetser 1996: 85, cf. 2000: 114-115, 2005: 32)

「雨が降らず、彼らが試合をキャンセルしない」という状況が成り立つスペースの設定があることは、予測的条件文では、(14)-(15) の下線部のような「推意」(implicature) (cf. Geis and Zwicky 1971, Grice 1989) を取り消す表現が後続可能であることから裏づけられる。

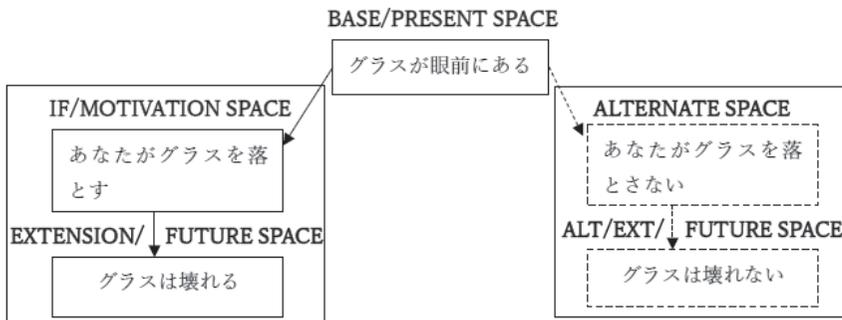
(14) If it doesn't rain, we'll go to the seaside. As a matter of fact, we'll go to the seaside anyhow, even if it rains. (Declerck and Reed 2001: 262)

(15) If it rains, we'll stay inside. In fact, we will stay inside anyhow, even if it doesn't rain. (Declerck and Reed 2001: 428)

(14) では、第1文における「雨が降れば、海辺に行かない」という推意が、第2文の「雨が降っても、海辺に行く」で取り消されている。(15) では「雨が降らなければ、室内で過ごさない」という推意が、後続する「雨が降らなくても、室内で過ごす」という文で取り消されている。

will は、動機づけとして機能する条件、その条件が満たされた場合の状況と満たされない場合の状況を含むメンタル・スペースを新たに設定する。(16) は (11b) の If you drop this glass, it will break が促すメンタル・スペース構築である。(16) は、Dancygier and Sweetser (1996, 2000, 2005) の予測的条件文の記述に、動機づけの概念/MOTIVATION SPACE を組み入れたものである。MOTIVATION SPACE の設定の随意性の在り方において、will と be going to は振る舞いを異にする。4節でも述べるように、各(疑似)法助動詞の意味論的・語用論的違いは、動機づけの特徴の違いと呼応する。

(16) If you drop this glass, it will break. のメンタル・スペース構築：



(cf. Dancygier and Sweetser 1996: 85, 2000: 114-115, 2005: 32-33)

BASE/PRESENT SPACE では、「グラスが眼前にある」といった話し手が現実的と捉える状況が成り立つ。IF/MOTIVATION SPACE では、動機づけとして提示された条件が満

たされた場合の状況「あなたがグラスを落とす」が成立する。さらに、その状況が満たされた場合の状況「グラスは壊れる」が EXTENTION/FUTURE SPACE で成立するに到る。ALTERNATE SPACE と ALT (ERNATE) /EXT (ENTION) /FUTURE SPACE には、「グラスを落とさなければ、グラスは壊れない」という推意として伝達される内容が含まれる。「予測」の will の場合、MOTIVATION SPACE の設定は、随意的なものではなく、常に行われるものと考えられる。will によって表されている動機づけは、言語化されていない場合でも、潜在的に含意される。たとえば、(17) では、if you leave it や if you are patient といった含意が看取される (Palmer 1990: 147)。

(17) The paint'll be dry in an hour. (Palmer 1990: 147)

また、「省略的」な文である (18a) においては、(18b) のような条件節を補うことができる (Binnick 1971: 3)。

(18) a. The rock'll fall.
 b. The rock'll fall if you pull the wedge out from under it. (Binnick 1971: 3)

3. 3. be going to のメンタル・スペース構築

be going to を含む文において、動機づけとして顕在的に提示される条件は、現実的なものになる。(19) の事例では、非現実的な動機づけ／条件があるため、「予測」の will の使用は自然であり、be going to の使用は不自然となっている。

(19) a. If you ever go to France, you {will/??are going to} enjoy your meals there.
 b. If she manages to improve her serve and her backhand, she {will/??is going to} take her place among the top players. ((19a)-(19b): Declerck 2006: 352)
 c. If you pay by cash you {will normally/?*are normally going to} obtain a receipt as proof of payment. (Leech 2004: 60)

Binnick (1971: 7) によれば、be going to が条件と共に起る際、その条件は、現在に関連するものであり、未来に関連するものにはならず、常に現実的である。

(20) What we should note is that where *be going to* has an apparent condition, ..., such a condition is always actual, not hypothetical; present, not future; always presupposedly

true.

(Binnick 197: 7)

動機づけとして提示される条件の現実性に関して (21) を見られたい。

- (21) ["I've lost my passport."] "If you have lost your passport, you're going to have a lot of trouble with the police." (Declerck 2006: 354)

ここでは、「パスポートをなくした」という先行発話がある。その発話を受けて「あなたがパスポートをなくしたというのなら」という動機づけが述べられている。佐藤 (2015: 165) によれば、(21) のような、帰結節に *be going to* を含む「エコー文」における *if* は、後続する内容が現実的であることを示唆する *since* と置き替え可能である。

また、Haegeman (1989: 299) は、(22) の事例を挙げ、当該の仕事の受諾を既に公表した人に対しての発話としては、(22) は自然なものであるとしている。

- (22) If you accept that job, you're never going to regret it. (Haegeman 1989: 299)

Declerck (1991: 115) は、*be going to* を後件に含む文の *if* 節は、*if it's the case that* や *let's assume that* でパラフレーズ可能であるとして、(23) を挙げている。

- (23) a. If he has strained his ankle, he is not going to compete in the race tomorrow.
b. You *are going to* be late if you don't hurry. (Fulfilment of the condition is taken for granted.) (Declerck 1991: 115)

また、(24) が (25) にパラフレーズ可能であることも指摘している。

- (24) If you've come here to find out more about our plans, you're going to be disappointed.
(25) If, as I believe is the case, you've come here... (Declerck 2006: 354)

さらに、Westney (1995: 83) によれば、(26) では、*present context setter* の *like this* が *be going to* の適切な使用を可能にしている。

- (26) You're *going to* be fired if you go on like this. (Westney 1995: 83)

Sweetser (1990: 128) は, if節の内容が現実的な条件文を「認識条件文」(epistemic conditionals) / 「言語行為条件文」(speech act conditionals) と称している。認識条件文の前件は「文脈的に既知」(contextually given/bound) とされ, Dancygier (1998: 111) によれば (27) を含むとされる。

- (27) (i) preceding utterance, (ii) immediate history of the current speech exchange stored in the short-term memory of interlocutors, (iii) the history of the relationship between the interlocutors, (iv) their encyclopedic knowledge related to the concepts occurring in the utterance to be interpreted. (Dancygier 1998: 112)

Dancygier (1998) や Dancygier and Sweetser (2005) は, 認識条件文を「非予測的条件文」(non-predictive conditionals) 呼んでいる。非予測的条件文は, if節の条件が満たされた場合の状況が内包されるスペースと, そのスペース内の状況に基づく判断が内包されるスペースを設定する (Dancygier and Sweetser 2005: 110)。

be going to は, 動機づけの事実的状況と, その動機づけに基づく判断内容を含むメンタル・スペースを新たに構築する。will とは異なり, 動機づけの状況が内包されるスペースの設定は随意的である。前出の (21) は, (28) のメンタル・スペース構築を促すと考えることができる。(28) は, Dancygier and Sweetser (2005) での非予測的条件文の分析に, will と be going to の違いに関与する, 動機づけの概念と述べられる状況の時間性の概念を組み入れたものである。

- (28) ["I've lost my passport."] If you have lost your passport, you're going to have a lot of trouble with the police. のメンタル・スペース構築：



(cf. Dancygier and Sweetser 2005: 119)

BASE/PRESENT SPACE では、先行発話の「パスポートを失くした」が含まれる。IF/MOTIVATION/PRESENT SPACE では、動機づけとして提示される条件が満たされた際の「聞き手がパスポート失くした」という現在の事実的状况が成立する。そして、その動機づけに基づく判断の「警察とトラブルとなる」が JUDGMENT/PRESENT SPACE で成立するに到る。なお、Leech (2004: 60) は、be going to の特徴を (29) のように述べている。

(29) *Be going to* implies that the conditions for the future event already exist.

(Leech 2004: 60)

これを想定すると、JUDGMENT/PRESENT SPACE 内の情報も「現在」に言及していると考えられる。(29) は、be going to で表される意味に「予測可能性」を含まない (7) の見解の再考を促すものと思われる。

Dancygier and Sweetser (2005: 117) によれば、非予測的条件文の if 節の機能は、主節の内容を導くために必要なコンテキストを想起させることにあるため、予測的条件文においては設定された ALTERNATE SPACE は関与しない。

be going to の場合、動機づけの内容を含むスペースの新たな設定は必須のものではなく、随意的であると考えられる。be going to を含む単文には、通例、条件的な含意が看取されない。Binnick (1971: 3) によれば、will とは異なり、(30) は省略的ではなく自己完結的である。

(30) a. The rock *is going to* fall.

b. As it happens, she's *going to* die.

(Binnick 1971: 3)

また、Palmer (1990: 147) によれば、(31) では、「(条件抜きで) パンキが一時間以内に乾く」と述べられている。

(31) The paint's *going to* be dry in an hour.

(There is inevitability; nothing will change the future event.)

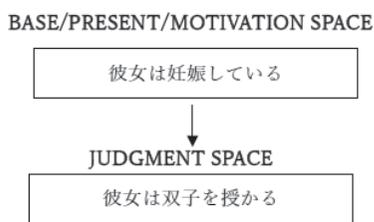
(Palmer 1990: 147)

be going to は、「兆候に基づく予測」(吉良 2010: 166) を表す。Leech (2004: 59) によれば、be going to の場合、未来の事象を生じさせる要因は発話時に存在する。すなわち、BASE/PRESENT SPACE に内包される兆候が、be going to を使ったのモダリティ表出の動機づけとなるケースも多く見られる。(32a) と (32b) では、それぞれ、「彼女が妊娠している」と「黒雲が集まってきている」という兆候を動機づけとして、「予測」のモダリティが表されている。

- (32) a. *She's going to have twins.* (i.e. 'She's already pregnant')
 b. *There's going to be a storm in a minute.* (i.e. 'I can see the black clouds gathering')
 (Leech 2004: 59)

be going to が if 節を伴わないケースでは、IF/MOTIVATION/PRESENT SPACE の設定はなく、BASE/PRESENT SPACE が MOTIVATION SPACE の機能も担うことになる。(33) は、(32a) の設定するメンタル・スペース構築である。

- (33) *She's going to have twins.* (i.e. 'She's already pregnant') のメンタル・スペース構築：



ここでは、「彼女は妊娠している」という兆候／動機づけが BASE/PRESENT/MOTIVATION SPACE で成立する。この兆候／動機づけをもとに表される判断結果の「彼女は双子を授かる」が、JUDGMENT SPACE で成立している。

以上、「予測」の will と be going to を、メンタル・スペースの現実性と非現実性、スペース内の情報の言語化、スペース設定の必然性と随意性、スペース内の情報の質の違いの視点から比較した。これらの分析視点は、義務的なモダリティを表す（疑似）法助動詞の分析にも有効である。

4. 義務的なモダリティを表す（疑似）法助動詞の分析

4.1. I need to と I have to

動機づけスペースの情報の言語化／非言語化の概念と、2.1. 節で紹介したメンタル・スペース構築に関連する Talmy や Johnson 流の「力」の概念は、義務的なモダリティを表す I need to と I have to の違いを説明するものである (cf. 長友 2019)。need to と have to は、共通の文法的特徴を有する。Coates (1983: 54-55) や Leech (2004: 102) では、(i) 倒置は do による：Does she {*need to / have to*} ...?, (ii) 否定は do による：We {*do / didn't*} {*need to / have to*} ...?, (iii) 3人称単数現在の -s 形式がある：She {*needs to / has to*} rest., (iv) 遠隔形がある：

She {*needed to* / *had to*} rest. という特徴が提出されている。また、両者の意味にも類似点が見られる。OALD¹⁰では、*need to* の意味が *have to* に相当すると記述されている。

Perkins (1983: 62) によれば、(34) に述べられているように、*need to* は、主語の「内部」(within) からもたらされる「強制」(compulsion) の力を意味する。

(34) It [=NEED TO] indicates a compulsion which comes from *within*. If I 'need to' rest, I feel a compulsion which, although it may be non-personal and beyond my control, is still felt to originate within myself. (Perkins 1983: 62)

I need to に関与する強制のタイプに関して、(35)-(36) の事例を見られたい。

(35) I *need to* get some fresh air. (Duffley 1994: 224)

(36) I *need to* hear a good loud alarm in the mornings to wake up. (Bybee et al. 1994: 17)

(37) I *need to* be loved. (Dixon 1991: 190)

Duffley (1994: 224) は (35) の「義務」は、主語の「内的気質」(internal disposition) に由来するとしている。Bybee et al. (1994: 177) によれば、(36) においては、行為を完結せずにはいられない気持ちにさせる、主語の身体的状態の存在が述べられている。Dixon (1991: 190) は、(37) の *need to* は、主語の身体的状態や感情的状態と関連している可能性があるとしている。いずれにせよ、話し手が話し手に力を行使するという、力のダイナミクスが看取される。

Westney (1995: 117) は (38) の事例を提示し、(39) のように *have to* には、話し手以外の力の関与があることを述べている。

(38) You *have to* be back in camp by ten.

(39) ... the addressee infers that such an obligation has an existence, and perhaps source, that is independent of the speaker. ((38)-(39) : Westney 1995: 117)

関連して、Coates (1983: 56) は、コーパスの事例において、*have to* の場合、話し手の関与のある主観的な事例は一例も存在しないと述べている。Perkins (1983: 60, 62) は、*have to* の「中核的な意味」(core meaning) に、話し手の関与はないとも主張している。同様の指摘は、Palmer (1990: 115) や Leech (2004: 80) にも見られる。

need to を含む発話において、一人称が主語になる場合、前述のように、話し手が義務の主体であり話し手自身が義務の客体となる。その際の内的な義務づけの動機づけとして想起され

る理由等は、話し手自身にとって自明なものとなる。よって、一人称単数の主語が *need to* と共起する場合、MOTIVATION SPACE 内の情報は、言語化されないことが予測されるが、事実はその通りである。(40) を考えてみよう。

(40) At that question, Carl turned to stare at him.

“Where the hell did you come up with that name? Lotty, what do you know about this? Did you bring this man here to taunt Max and me?”

“I?” Lotty said. “I—*need to* sit down.”

Her face had gone completely white. I was just in time to catch her as her knees buckled.

(S. Paretsky, *Total Recall*) (斜体筆者)

ここでは斜字体部でロティが座る必要があると述べているが、「このままだと倒れるから」、「具合が悪いから」といった話し手自身の身体状態に由来する自明な動機づけは顕在的に表現されていない。インフォーマント調査によると、(40) の *need to* は、外部的義務と関連する *have to* には、通例、置き換えることはできない。

(41) “I?” Lotty said. “I—*need to* / *??have to* sit down.” (コンテキスト = (40))

次の例も同様である。

(42) I managed to reach Murray at his desk. “I have a hypothesis, but I *need to* test it. Can you meet me on the North Side this afternoon?”

“This anything to do with young Messenger?” Murray rumbled at me.

(S. Paretsky, *Tunnel Vision*)

ここでは、仮説を実証する必要があると述べられているが、「私にとって重要だから」、「どうしても実証したいから」といった話し手自身の心的状態に由来する自明な動機づけは、言語化されていない。ここでの *need to* から *have to* への書き換えも不自然となる。

(43) I have a hypothesis, but I *need to* / *??have to* test it. (コンテキスト = (42))

4.2. *must* と *have to*

3 節において、*will* と *be going to* では、メンタル・スペース内の情報の現実性に違いがあ

ることを指摘した。メンタル・スペースの現実性の観点から、義務的な *must* と *have to* との違いも明らかになる。まず、2.1.節で見たように、*must* は、非現実的情報を内包するスペースを構築すると捉えることができる。

(44) (= (1)) You *must* stop smoking in here.

ここでの BASE SPACE では、「あなたは煙草を吸う」という現実的内容が成り立つ。*must* によって導入された MUST SPACE では、「あなたはたばこを吸わない」という未来の実現されていない非現実的状況が成立する。

have to は現実的情報を内包するスペースを新たに導入する。まず (45) を見られたい。

(45) a. He's *got to* go again next Tuesday.

b. He *has to* go again next Tuesday.

(Matthews 1991: 269)

Matthews (1991: 269) は、(45a) の方が (45b) より一般的としている。*have got to* の場合、強制内容の「彼が来週火曜日に再度行く」ことが実現するのは、義務が生じている時間 (= 現在) より後であり、*have to* の場合、通例、「彼が来週火曜日に再度行く」という強制内容が実現するのは、義務が生じている時間 (= 現在) と同時か、または、それよりも前になる (澤田 2014: 391, 2018: 160)。次の例を考えてみよう。

(46) In my job I *have to* work from nine to ten.

(Swan 2005: 336)

have to の場合、強制内容が実現するのが義務の生じている時間より前になることがあると想定すると、(46) の「私の仕事では私は9時から10時まで働くこと」は現実的内容となることもあることになる。事実、(46) は (47) を含意する。

(47) In my job I work from nine to ten.

(澤田 2018: 157)

よって、*have to* の設定する HAVE TO SPACE では、「私の仕事では、9時から10時まで働く」という現実的情報が成立すると考えることができる。

4.3. *must*, *should*, *had better*

3 節では、ある状況が満たされた場合の未来の状況を内包する EXTENSION/FUTURE

SPACE の関与が, will の特徴であることを論じた。EXTENSION/FUTURE SPACE の情報の内容の「好ましき」を明らかにすることにより, must, had better, should の比較が可能になる (cf. 長友 2018a : 154)。must においては, 好ましい動機づけの状況と好ましくない動機づけの状況の双方が EXTENSION/FUTURE SPACE で成立し得る。(48) を考えてみよう。

(48) [コンテキスト : 話し手は山中でどの道を下ろうかと思案している]

I *must* go down this road {*or/and*} they may find me. (澤田 2018: 148)

澤田 (2018: 148-149) が指摘するように, ここでの they が, 敵 (たとえば, 追っ手) を指している場合, or が選択され, or 以降は, 「さもないと, 奴らに見つかってしまうかもしれない」と解釈される。すなわち, ここでの EXTENSION/FUTURE SPACE は, 「私」が道を下らない場合の, 好ましくない動機づけの情報を含むスペースである。一方, they が味方 (たとえば, 救急隊など) を指している場合, and が選択され, and 以降は, 「そうすれば彼らが見つけてくれるかもしれない」と解釈される。すなわち, ここでの EXTENSION/FUTURE SPACE は, 「私」が道を下らない場合の好ましくない動機づけの情報を含むスペースである (cf. 長友 2012: 25)。

had better では, 通例, 好ましくない動機づけの状況が EXTENSION/FUTURE SPACE で成立する。Michell (2003: 146) が述べるように, had better には, 「警告」や「脅し」の含意があり, had better は指令型の発話に従わない際の「さもないと～」といった言外の意味を伝達する。Palmer (1990: 82) によれば, (49) と (50) では, had better を用いて, 話し手は最善の行動を「忠告」している。そして, 話し手は「忠告」に対して揺るぎのない態度を表明しており, 行動に移されなかった際には, 好ましくない結果が後続することがあると伝達している。

(49) You'd *better* ask him when he comes in.

(50) I'd *better* take that down again. ((49)-(50) : Palmer 1990: 82)

had better に関与する動機づけの好ましきに関して, (51) を考えてみよう。

(51) “There,” said Lili after a final rub.

“There may be a mark, but it won't show too badly. You'd *better* find a plaster for that thumb or it might start bleeding again.” (BNC G06 851)

(51) では、「さもないとまた出血してしまうかもしれない」という、好ましくない動機づけが述べられている。ここでの下線部を好ましい状況に置き換えると不自然な表現となる。

(52) ??You'd better find a plaster for that thumb, and it will heal up.

(53) のような「ぜひとも～しなさい」 (= must) のような用法は、had better には観察されないことも、had better には、好ましい動機づけの状況を内包する EXTENSION/FUTURE SPACE の関与がないことを示唆するものであろう。

(53) Oh, you {*must*/**had better*} come round and see it. (「勧誘」) (cf. Palmer 1990: 73)

had better とは対照的に、should の場合、好ましい動機づけの状況を内包する EXTENSION/FUTURE SPACE が設定される。Lakoff (1972: 911) は、must との対比で、should を (54) のように特徴づけている。

(54) Going by the ordinary uses of the modals, *must* imposes an obligation, while *should* merely gives advice that may be disregarded (Lakoff 1972: 911)

should は「助言」と関連するとする指摘は、Westney (1995: 166-167) や Carter and MaCarthy (2006: 653) にも見られる。Westney は、(55) のような should の事例は、通例、話し手自身の望みや「助言」を含意するとしているとしており、Carter and MaCarthy は、(56) のような should は、最も一般的には「助言」や「提言」(suggestion) を行う際に用いられるとしている。

(55) You *should* see Mary some time. (Westney 1995: 166-167)

(56) a. You *should* tell him straight what you think.

b. We *should* leave it till tomorrow, don't you think. (Carter and MaCarthy 2006: 653)

強い強制の力を伴わない「助言」を表す should が、「さもないと悪いことが起こる」いう「脅し」のニュアンスのある好ましくない状況と共起するのは不自然である。一方、強制の度合いは低いものの、「助言」に従えば、良いことがあると述べるのは自然である。よって、should は、通例、聞き手にとって好ましい動機づけと呼応することが予測される。

(57) "... you *should* read Jane Austen and then you'll feel better." (BNC B0H 439)

(57) では、「あなたは気分が良くなる」という好ましい状況が動機づけとして想起されている。ここでの動機づけを、聞き手にとって好ましくない状況にすると、容認度の低い文となる。

(58) ??You *should* read Jane Austen, or you'll regret later.

5. 終わりに

本稿では、意味論的・語用論的特徴を反映する中で、(疑似)法助動詞の促すメンタル・スペース構築を提出した。モダリティの本質は現実性／非現実性ではなく、確言／非確言に関連するという立場のもと、(疑似)法助動詞の意味論的・語用論的考察とメンタル・スペースの概念を融合する中で、「予測」の will と be going to の分析を試みた。そして、will と be going to との比較を可能する、スペースの現実性の違い、スペース内の情報の言語化の有無の違い、特定のスペースの設定の必然性の違い、スペース内の情報の質の違いの分析視点は、義務的モダリティを表す(疑似)法助動詞の比較にも有効であることを主張した。本アプローチからの異なるモダリティを表す英語(疑似)法助動詞の考察や、副詞などの他のモダリティを表す表現に関しての考察等については、稿を改めて論じることとしたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP18K00671 の助成を受けたものです。

参考文献

和文論文

- 吉良文孝 (2010) 「未来表現」澤田治美・高見健一 (編) 『ことばの意味と使用』 161-173. 東京: 鳳書房.
- 長友俊一郎 (2012) 「英語モダリティと動機づけ」澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座4』 17-35. 東京: ひつじ書房.
- 長友俊一郎 (2018a) 「must/had better/should に関与する動機づけとメンタル・スペース」『松山大学 言語文化研究』 38: 141-164.
- 長友俊一郎 (2018b) 「英語法助動詞の命題内容の時間性と現存性をめぐって」『関西外国語大学 研究論集』 108: 169-187.

- 長友俊一郎 (2019) 「束縛的モダリティを表す need to と have to をめぐって」 澤田治美・仁田義雄・山梨正明 (編) 『場面と主体性・主観性』 485-513. 東京: ひつじ書房.
- 佐藤健児 (2015) 「条件文の帰結節における be going to に関する意味論的・語用論的考察」 『国際モダリティワークショップ発表論文集』 8: 161-176.
- 澤田治美 (1999) 「語用論と心的態度の接点」 『言語』 28 (6): 58-63.
- 澤田治美 (2006) 『モダリティ』 東京: 開拓社.
- 澤田治美 (2014) 『現代意味解釈講義』 東京: 開拓社.
- 澤田治美 (2018) 『意味解釈の中のモダリティ (上)』 東京: 開拓社.

英文論文

- Binnick, Robert I. (1971) *Will and be Going To*. *CLS* 7: 40-52.
- Boogaart, Ronny and Egbert Fortuin (2016) Modality and mood in Cognitive Linguistics and Construction Grammars. In Nuyts, Jan and Johan Van Der Auwera (eds.) *The Oxford handbook of modality and mood*, 514-533. Oxford: Oxford University Press.
- Bybee, Joan L., William Pagliuca, and Revere Perkins (1994) *The evolution of grammar: Tense, aspect, and modality in the languages of the world*. Chicago: Chicago University Press.
- Carter, Ronald and Michael McCarthy (2006) *Cambridge grammar of English: A comprehensive guide*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Coates, Jennifer (1983) *The semantics of the modal auxiliaries*. London: Croom Helm.
- Dancygier, Barbara (1998) *Conditionals and prediction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dancygier, Barbara and Eve Sweetser (1996) Conditionals, distancing, and alternative Spaces. In: Adele E. Goldberg (ed.), *Conceptual structure, discourse, and language*, 83-98. Stanford: CSLI.
- Dancygier, Barbara and Eve Sweetser (2000) Constructions with *if*, *since*, and *because*: Causality, epistemic stance, clause order. In: Bernd Kortmann and Elizabeth Closs Traugott (eds.) *Cause-condition-concession-contrast: Cognitive and discourse perspective*, 111-142. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Dancygier, Barbara, and Eve Sweetser (2005) *Mental spaces in grammar: Conditional constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Declerck, Renaat (1991) *A comprehensive descriptive grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Declerck, Renaat (2006) *The grammar of the English verb phrase. Volume 1: The grammar of the English tense system*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Declerck, Renaat and Susan Reed (2001) *Conditionals: A comprehensive empirical analysis*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Dixon, R. M. W. (1991) *A new approach to English grammar, on semantic principles*. Oxford: Clarendon Press.

- Duffley, Patric (1994) *Need and dare: The black sheep of the modal family*. *Lingua* 94: 213-243.
- Fauconnier, Gilles (1994) *Mental spaces: Aspects of meaning construction in natural languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fauconnier, Gilles (1997) *Mappings in thought and language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Geis, Micheal L. and Arnold M. Zwicky (1971) On invited inferences. *Linguistic Inquiry* 2: 561-566.
- Grice, Paul (1989) *Studies in the way of words*. Boston: Harvard University Press.
- Haegeman, Liliane (1989) *Be going to and will: A pragmatic approach*. *J. of Linguistics* 25: 291-317.
- Johnson, Mark (1987) *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, Robin (1972) Language in context. *Language* 48: 907-927.
- Lampert, Günther and Martina Lampert (2000) *The conceptual structure(s) of modality: Essence and ideologies*. Frankfurt an Main: Peter Lang.
- Leech, Geoffrey (2004 [1971]) *Meaning and the English verb*. Third edition. London: Longman.
- Lunn, Patricia (1995) The evaluative function of the Spanish subjunctive. In Bybee, Joan and Suzanne Fleischman (eds.) *Modality in grammar and discourse*, 429-449. Amsterdam: John Benjamins.
- Matthews, Richard (1991) *Words and worlds: On the linguistic analysis of modality*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Perkins, Michael R. (1983) *Modal expressions in English*. London: Frances Pinter.
- Palmer, Frank R. (1990) *Modality and the English modals*. Second edition. London: Longman.
- Palmer, Frank R. (2003) Modality in English: Theoretical, descriptive and typological issues. In: Facchinetti, Krug, and Frank Palmer. (2003), 1-20.
- Swan, Michael (2005) *Practical English usage*. Third edition. Oxford: Oxford University Press.
- Sweetser, Eve E. (1990) *From etymology to pragmatics Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: University of Cambridge Press.
- Talmy, Leonard (1988) Force dynamics in language and cognition. *Cognitive Science* 12: 49-100.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics. Vol. 1: Concept structuring systems*. Cambridge: MIT Press.
- Westney, Paul (1995) *Modals and periphrastics in English equivalents: An investigation into the semantic correspondence between certain English modal verbs and their periphrastic equivalents*. Tübingen: Niemeyer.

辞書

OALD¹⁰: Oxford Advanced Learner's Dictionary-10th

長 友 俊一郎

コーパス

BNC: British National Corpus (BNC World Edition)

小説

Paretsky, Sara. (1994) *Tunnel Vision*. New York: Dell.

Paretsky, Sara. (2001) *Total Recall*. New York: Dell.

(ながとも・しゅんいちろう 英語国際学部教授)